

(様式 4)

【地方公共団体の名称】

1人1台端末の利活用に係る計画

1. 1人1台端末を始めとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

「Society5.0」時代の到来や、人口減少と少子高齢化、高度情報化の急速な進展、SDGsに関する取組など、教育を取り巻く環境が大きく変化し、教育の在り方についても時代に応じた変革が求められている。

学校教育においては学習指導要領の着実な実施とICTの活用により「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること（学習指導要領前文）」が重要であり、これからの社会を生きる子供たちに必要な資質・能力を育むためには、GIGAスクール構想で整備したICT環境を基盤として、子供たち一人一人の教育的ニーズに応じた「個別最適な学び」と、多様な他者と共に問題の発見や解決に挑む「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組を一層推進していくことが求められる。

そこで、本町では、GIGAスクール構想により実現した、児童生徒の1人1台端末環境をいかし、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図るとともに、子供たちが自ら進んで学習する自律的な学習者となり、自由な発想でICTを活用し、見出した課題を主体的に解決する探究的な学びを推進する。また、子供たちがICTを十分活用し、その恩恵を享受できるようにするために、教職員のICT活用指導力向上、ネットワーク環境の整備、教育データの活用、推進体制の整備、校務の改善等、ICT教育環境をソフト面、ハード面の両方で整備していく。

2. GIGA第1期の総括

国のGIGAスクール構想を踏まえ、令和元年度に整備していた端末に加え、令和2年度に本町全児童生徒に1人1台端末及び全学校における通信ネットワーク等を整備した。そして、学校現場における教科や学習場面に応じた学びのツールとして1人1台端末の日常的な利活用を図ってきた。授業支援ソフトやタブレットドリル等の活用については、初めこそ教員による個人差が見られたが、町教育委員会よりICT活用段階表を提示したり、教員研修等を行ったりしたことで、GIGA4年目となった今では、ほぼ全ての教員が学習場面に応じ、積極的に活用している様子が見られている。また、端末の持ち帰りについても日常的に実施し、家庭学習などでも端末を活用することで、児童生徒の学習意欲の向上に努めてきた。さらに、少人数の学校間でウェブ会議システムを活用したオンライン合同学習や、同学年間の共有クラウドを活用し、学校の枠を超えて協働的に学ぶ機会なども多くなってきている。

しかし、ネットワークの接続が不安定で、授業における端末使用に支障をきたしているという事象もよく起きている。さらに、端末導入から3年を経過した頃から、故障台数が急激に増加し、保証上限金額を上回る修繕費がかかることや修繕に大変期間がかかるといった状況から、準備していた予備機だけでは運用できない状況も見られた。GIGA第2期では、ネットワークの改善を図り、十分な予備機を整備することで、端末不足への課題解決を図っていく。

3. 1人1台端末の利活用方策

GIGAスクール構想により1人1台端末等の整備、活用を始めてから5年目に入り、教員や児童生徒による授業や家庭学習での日常的な活用が定着してきている。児童生徒の学びの道具としての1人1台端末は、端末整備・更新計画に基づき引き続き適切に維持・更新していくことを前提として、以下のように利活用を進めていく。

(1) 1人1台端末の積極的活用について

本町小中学校の端末活用状況については、令和6年度全国学力・学習状況調査結果（「週3回以上、授業で端末を使用した割合」小学校6年：本町79.0%、全国59.5%、中学校3年：町85.5%、全国64.4%）から進んでいることが伺える。また、家庭への持ち帰りも全ての小中学校で、日常的に実施している。

1人1台端末を積極的かつ効果的に活用するためには、教員がICT活用の目的を理解し、ICTを活用した指導力を向上させることが必須である。今後は、児童生徒による校内及び家庭学習で1人1台端末を活用する機会をさらに増やし、情報活用能力の育成に取り組むため、授業支援ソフトやタブレットドリル、学習者用デジタル教科書等の見直しを行い、ICT活用に関する研修を積極的に実施するとともに、授業支援システムやアプリ等を校務等の業務でも活用することを進め、教員のICT活用能力のより一層の向上を図る。また、ICT活用をサポートするICT支援員を引き続き配置し、ICTを活用した授業等を教員がスムーズに行える環境についても整える。

(2) 個別最適・協働的な学びの充実について

授業支援ソフトやタブレットドリル等の導入により、教師のICTを活用した授業づくりに対する意識が高まり授業改善が進んできている。これからの社会に対応する資質・能力を育成するために、基盤となる情報活用能力を育成するとともに、「自ら学び取る授業」の実現に向けた探究的な学びに取り組み、児童生徒が学びのツールとしてクラウド活用することにより、児童生徒一人一人が目標に向かって、情報を収集しながら自分のペースで学習したり、共有機能やオンライン会議等を用いて、他者の考えを参照したりしながら自ら学んでいくような授業（個別最適な学び、協働的な学び）の推進を図る。デジタルとアナログのベストミックスを図り、問題発見解決型の探究的な学習と自由進度学習等、さまざまな学習方法についても調査研究を進めていき、児童生徒自ら情報を収集し、分析する過程で自主性を育み、グループワークやディスカッションをとおして協調性やコミュニケーション能力の向上を図っていく。

(3) 学びの保障について

デジタル教材やオンライン授業の実施等1人1台端末を活用することにより、学びの幅を広げ、不登校児童生徒や病気療養等、特別な支援を要する児童生徒の実態に合わせた活用を推進し、様々な状況の児童生徒の学習機会を確保していく。

また、ネットワーク環境が整えられている家庭と整えられていない家庭とで家庭学習の差がつかないように、無線ルーターの貸出等を行うとともに、オフラインでも利用できる学習支援ソフト等の活用を図っている。情報通信環境に左右されない学習支援に取り組んでいく。